

# 気づきを促すためのライフストーリー研究に関する考察

日本語教師の語る「非公式な学び」を通して

A Study on Life-story Method for Rising Awareness:

Through the Stories of “Non-formal and Informal learning” by the Japanese Language Teachers.

松下恵子

Keiko Matsushita

大阪大学

Osaka University

Key words: インフォーマル学習, 気づき, ライフストーリー

## 目的

「学習」を大きく分けると、学校教育や教師養成講座、教師研修などの「公式」と、それ以外の「非公式」という2つに分けることができる。OECD(2007)の定義によると「**非公式学習**」には、勉強会や独学のように‘学ぼう’とする明確な意識を持つ「**ノンフォーマル**」と、生活の中での経験や出来事などから無意識のうちに学ぶという‘学ぼう’とする意識を持たない「**インフォーマル**」があるとする。筆者は非公式学習の重要性に着目し、「日本語教師の‘非公式な学び’とは何か—ノンフォーマル・インフォーマルの観点から—」という研究を現在進めている。そしてリサーチクエスチョンを「日本語教師の語る“非公式な学び”の中で、ノンフォーマル・インフォーマルな学習がどのように行われているのか、またそれらが教師自身にどのような影響を与えているのか」と設定し、グッドソン(2005)らの教師研究において選択されているライフストーリー法を使用することにした。

本発表の目的は、「**インフォーマル学習**」つまり「学ぼう’とする意識を持たない学習」をどのように**ライフストーリー**で明らかにすることができるのかを考察することである。言い換えると、「**聞き手と語り手の相互作用によって“無意識な学び”に関する気づきを得ることができるのか**」ということについて、ライフストーリー研究の特徴を挙げ、またこれまでの筆者の調査を振り返りながら考察することである。

## 方法

初めに「非公式な場」「インフォーマル・ノンフォーマル」の定義と筆者の研究内容の説明をする。次に質的研究・ライフストーリー研究の特質を挙げた上で、「気づき」を得ることをテーマとしているライフストーリー研究の先行研究を取り上げる。また、ライフストーリーや筆者の研究内容が対人援助実践のスタンスにどのように関係しているのかについても言及する。そしてこれまで行ったパイロット調査と本調査の内容を紹介し、「“無意識な学び”に気づく」とはどういうことなのかについて考察

する。また、これまでの調査の反省点を踏まえながら調査手法の再検討と修正を行う。最後に気づきを促すライフストーリー研究とはどのようなものであるかをまとめ、今後の調査の方向性について示唆したいと思う。

## 結果と考察

ライフストーリー研究とは、**経験を意味づける**行為であり、語り手と聞き手の**相互作用により構築**していくこと(やまだ,2000)から、「インフォーマル学習」を明らかにするための最適な研究方法であると言える。またこの研究を行うことは、これまで気づけなかった新しい世界に気づくという意味でも**個人の成長**や**自己肯定**、**自己決定**といった**対人援助学**にも通じるものである。

パイロット調査では、「趣味で続けていたことが生徒との接し方に良い変化をもたらした」という**語り手の気づきを得ることができた**。しかし、インタビューの方法やデータの分析方法、記述方法などの技法的な部分で課題が残った。本調査はパイロット調査の反省を踏まえ取り組んだが、インタビューの最中に聞き手である筆者が、自分自身の問いにズレがあることに気づき、**リサーチクエスチョンを修正**した。また語り手も自分の経験を語ることやインタビュー中の筆者とのやりとりがきっかけとなり、もう一度その**経験を捉え直し**今後の自己決定の方向性を考える機会となった。

このように、ライフストーリー研究における聞き手と語り手の相互作用は、研究目的を達成するのみならず、**双方の新たな気づきを促進し、自分自身の変化や成長を捉える**といった効果もあることがわかった。

## 参考文献

- グッドソン, F. I. (2005). 高井良健一ほか(訳)『ライフストーリーの教育学—実践から方法論まで』昭和堂。  
やまだようこ(2000).『人生を物語る—生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房。  
OECD (2007).『学習成果の認証と評価 働くための知識・スキル・能力の可視化』明石出版。